岩戸開道歌集

第六卷

258
326

特50
879

御製

むらきもの
心をたねの
をしへくさ
わひしけらせよ
やまとしまねに

右は明治三十九年十一月廿五日歌道奬勵會に賜ひしものなり
謹しみて寫してこゝに掲ぐ

明治
40 12 14
内交

神拜の心は、神國根元の御はらひに依て、なす事なれども、世の人の拜む心はちがふなり。其のゆゑは、わづかの初穗賽錢を供へ、家内安全、息災延命、武運長久など祈り、又其の上に愚癡貪欲のものは、立身出世、位を增し、祿を益し、金銀の手に入る樣、又町人などは商ひ繁昌、利分澤山にある樣、能き儲口を願ふ、其外我が心に思ふままの貪欲言語に申し難く、人には語ら

れぬ程の邪事まで祈り、又其の上何の品を納め、何を建立仕るに依て此の願ひを御聞き、下されなど願ふ者多し、淺ましき事ならずや。神は非禮を受け給はず、又貪欲の心をにくむ、我が立身するには止たる役人死するか、又は、しくじるか致さねば、立身なり難し。我が祿增すには、人の祿減少せねば己が祿益さず、我に金銀多く手に入れば、人の金銀を失ふ。是をかへ

りみず、神に祈るは人を調伏するに等しきか、又何の品を建立し奉納仕るに依て、此の願ひを叶ひたまへ抔と申す事は。賄賂にあらずや、人間の教にすら、かかる事を嫌ひ禁しむ、なんぞ神明賄賂を受け給はんや、笑ふべきの甚しきなり。家を修め國を治むる者、我れよかれ人あしかれなど思召す心にて、家も國も長く治まるの道理なし。よく〳〵御考へあるべし。

右教祖井上正鐵大人の御詞なり。今書き記してはしがきの代りとす。

明治四十年十一月二十三日

中山瀧太誌す

（一）

學問と息のをしへは。裏れもて。

かげとかたちの。如くなりけり。

（二）

學問を。入れる心の。うつはから。

まづ清潔に。みがく御はらひ。

御はらひの元はたつたの神やしろ。
天の御はしら。國の御はしら。

神風の吹きつたはりて。神代から。
長くつたはる。日の本のくに。

日の本の國體を見て。神とくの。
廣大なるを。あふげ。世の人。

世の中の人の心のよしあしは。
天の氣候にあらはるるなり。

（七）

天地の中をにごすも。心から。
はらひてすませ。四方の人々。

（八）

種々の心をはらふ。草なぎの。
つるぎは。れのぶ。息のたち風。

（九）

やどる時。うむ時、産れかはる時。
吹き出す息は。いせの神風。

（十）

神業に。産れ出でたる人なれば。
みな神業に。かへるとは知れ。

産れ子に。息はかよへど。心なし。
をしへ次第に。こころつくなり。

一ツ事。子にいくたびも。くりかへし。
をしへさとすも。親の慈悲かな。

のりの道。見ても聞いても。はらはずば。
身の行ひに。出來かぬるなり。

のりの道。見たり聞いたり。してはらへ。
息のくささの。あらん限りは。

（五十）

うら事を。教へて人を馬鹿にすな。
いきの神罰。あるを思ひて。

（六十）

息神の。めぐみを知らぬ。ものどもは。
勇氣も。自然。なまいきになる。

（七十）

はらはねば。れのが心は。鬼が島。
はちもをろちも。住居するなり。

（八十）

衣食住。たらぬ人さへ。あるものを。
たれば足るはど。不足たらぐ。

人の身は。すべて。病の。入れ袋。
うれを洗ふは。みうろぎの道。

みうぎして。心の内の。井戸さらひ。
せずば息まで。くさくなるなり。

もろともに。天の眞名井に。みうぎして。
やまとごころを。みがけ世の人。

御をしへの。元は天照大御神。
歌のはじめは。須佐の男の神。

(三十二)

天照す。神のつたへの。御かがみは。
こころの床に。いつきまつれや。

(四十二)

御かがみの。心をみがく。御をしへを。
知らねばくもる。知ればくもらず。

(五十二)

人毎に。むねの十種の。御たからを。
みがきあぐれば。みな石の神。

(六十二)

神風に。はれてうれしや。むねの内。
こころにかかる。雲霧もなく。

(二十七)

まちくの。意はせて。一すぢの。
やまと心は。日の神のいき。

(二十八)

息神を。造化の神と。さとりなば。
人は一個の。小天地かな。

(九十二)

戰爭の。時には外を。祈るまし。
我が息神に。こころまかせて。

(十三)

日の本の。誠の道を。まもりなば。
きみには忠義。れやに孝行。

國王は。よろずの國に。多けれど。
我が日の本の。きみは天王。

有難や。身も家國も。ただやかに。
たもちゆくべき。御教ぞ是れ。

迷信は。我欲のために。たこるなり。
となへ言葉の。わけもわからず。

うら事の。教の道が。はびこりて。
浮世の中を。うろうでかためる。

うら事やたはむれ事や。よまひ事。
まことの道に。かなふ事なし。

もろともに神の御息を。あふげかし。
心にかかる。ぶくばらひして。

願はずとも。家内安全。うくさいに。
なるぞうれしき。御はらひの德。

神道は。質素をまもり。家國の。
長くをさまる。教なりけり。

あらたふと。玉のすだれを。巻き上げて。
むねの岩戸を。ひらく御をしへ。

日の本の誠の道の。ありがたさ。
身も家國も。やすくさまる。

はらいして。息の教を。まもりつつ。
家業をはげむ。心やすさよ。

身のやまひ。心のやまひ。なくなれば。
これにこたる。経済はなし。

かんごくや。病院に入る。身となるも。
みな御はらひの。道知らぬゆゑ。

御はらひは。すべて病の。根をたやす。
これにこたへる。妙藥はなし。

世の中の。智者も學者も。みうぎして。
息のくささを。吹きはらへかし。

眞心の。かれきに花も。さきみたま。
奇御魂との。御めぐみを知れ。

しぶ柿も。ちぎられてころ。串柿の。
くしき靈の。味あらはるれ。

恐ろしき。むねのをろちを。斬りはらひ。
くしき靈を。見する御をしへ。

父母の。息はこの身の。つくり主。
造化の神の。わけみたまなり。

蒼天が。こころの中に。ある事を。
知らねば迷ふ。知れば迷はず。

(五十一)

宗教のかずも百千あるなれば。
人の迷ふも無理なかりけり。

(五十二)

春風にさくらの花もさきにほふ。
やまと心をひらけ世の人。

(五十三)

草も木も四季に從ふものなれば。
時世の風にうつむかれはせず。

(五十四)

息神は草にも木にもかよふなり。
鳥けだものや虫けらにまで。

(五十五)

萬物を。神の書物と。わきまへて。
みな神眼を。あけてみよかし。

(六十五)

時世とて。名のない草も。春くれば。
花もさくなり。實もむすぶなり。

(七十五)

目の上に。ちからを入るるな。足元に。
ちからなければ。けつまづくなり。

(八十五)

妄談や。下説の繩に。しばられて。
神のをしへも。きけぬくるしさ。

をさな子の。次第くに。智恵づくも。
いきの神徳。あれば なりけり。

息神の。あつきめぐみを。知らぬゆゑ。
やまひにかかり。災難も來る。

れのが身も。心もあてに。ならぬゆゑ。
いきの神徳。たのめ。世の人。

子も孫も。息の神徳。たのみつつ。
血筋のたねを。長くたもてや。

口は言ふ。目は見る。耳は音をきく。
ふしぎなるかな。息のはたらき。

ちはやぶる。惡き意を。みろぎして。
やまと心に。みがく御はらひ。

はらはねば。心のうちも。夕霧の。
はれぬ思ひに。くらくなるなり。

出る息の。臭きにはひが。罪なれば。
まことの神は。入る息と知れ。

(七十六)

息合のあしき時には。腹も立つ。
ひがみもねたこころる。慢心も出る。

(八十六)

かんしやくの。虫もわくかな。たのが身に。
はらふみろぎの。道を知らずば。

(九十六)

我がままの。心のふねを。みろぎして。
つくり直せば。岩くすのふね。

(十七)

みろぎして。身の方角が。定まれば。
世の方角に。まよふことなし。

ふる雪は。ひなも都も。へだてなく。
きよき心を。人にもてとや。

息神に。さはりなければ。たたりなし。
いきの臭さを。はらひ清めて。

日の本の神の鏡を。見てさとれ。
地球の上の。人はのこらず。

日の神の。ひかりなければ。御鏡に。
かはも心もうつることなし。

はたるはどの。かゞやく神に。迷ふゆゑ。
まことの神の。道はわからず。

人の身は。すべて天地の。如くなり。
こころは月に。いきは日の神。

息吹戸の。神のつたへの。あればこそ。
むねの岩戸は。ひらかれもすれ。

出る息に。臭きにはひの。なくなれば。
神と同根。同霊と言ふ。

順逆の道がわかれば天てらす。
神の御息のたふときを知る。

勤勞に敵ふ貧乏神はなし。
うろは誠の道にかなはず。

御教と。ともにつたはる日の本の。
天つ日つぎの明德を知れ。

さく花も。みのるうの實も。みな元は。
天てらす神の御めぐみなり。

心にも。及ばぬ事を。し遂ぐるは。
こころの元の。息の神徳。

かしこくも。神の言葉を。きく耳と。
なるもうれしや。御はらいの徳。

はらはねば。わかる事なし。むねの内。
息とこころと。混沌として。

心はど。ころく迷ふ。ものはなし。
息にこころを。つけよ世の人。

(七十八)

災難も。身のわづらひも。日の神の。
息の神徳。知らぬゆゑなり。

(八十八)

我欲から。誠の道を。ふみはずし。
けつまづくのも。息の神ばつ。

(九十八)

直き道。まはりくて。迷ひなば。
息の神とく。知らで死ぬべし。

(十九)

ふもとより。登りて見れば。よくわかる。
不二の御山の。みねの高さも。

(九十九)

はらひして。心のうちを。廣くせば。
世界はすべて。身のうちにあり。

(二十九)

世の中を。息のまにく。わたるかな。
身のうきふしは。時にまかせて。

(三十九)

財産は。世のためにこそ。思ふなれ。
我が身のためは。けんやくにして。

(四十九)

財産のあるが上にも。欲しがれば。
身に災難のつきまとふなり。

(九十九)

世の人の頭の蠅を。れふもよし。
されどれの。われに。とまる蠅から。
もろともに。家業の道も。れこたらず。
つとめゆくのも。息の神德。

(九十八)

日の本の誠の道を。たどりなば。
うろでかためた。世にも迷はじ。

世の中に親のない子は。さらになし。
血筋のたねを。れもへ世の人。

父の息母のからだと。わきまへて。
見ればたふとき。れのゞ身の上。
神德の廣大なるを。わきまへば。
息のをしへを。まもる外なし。

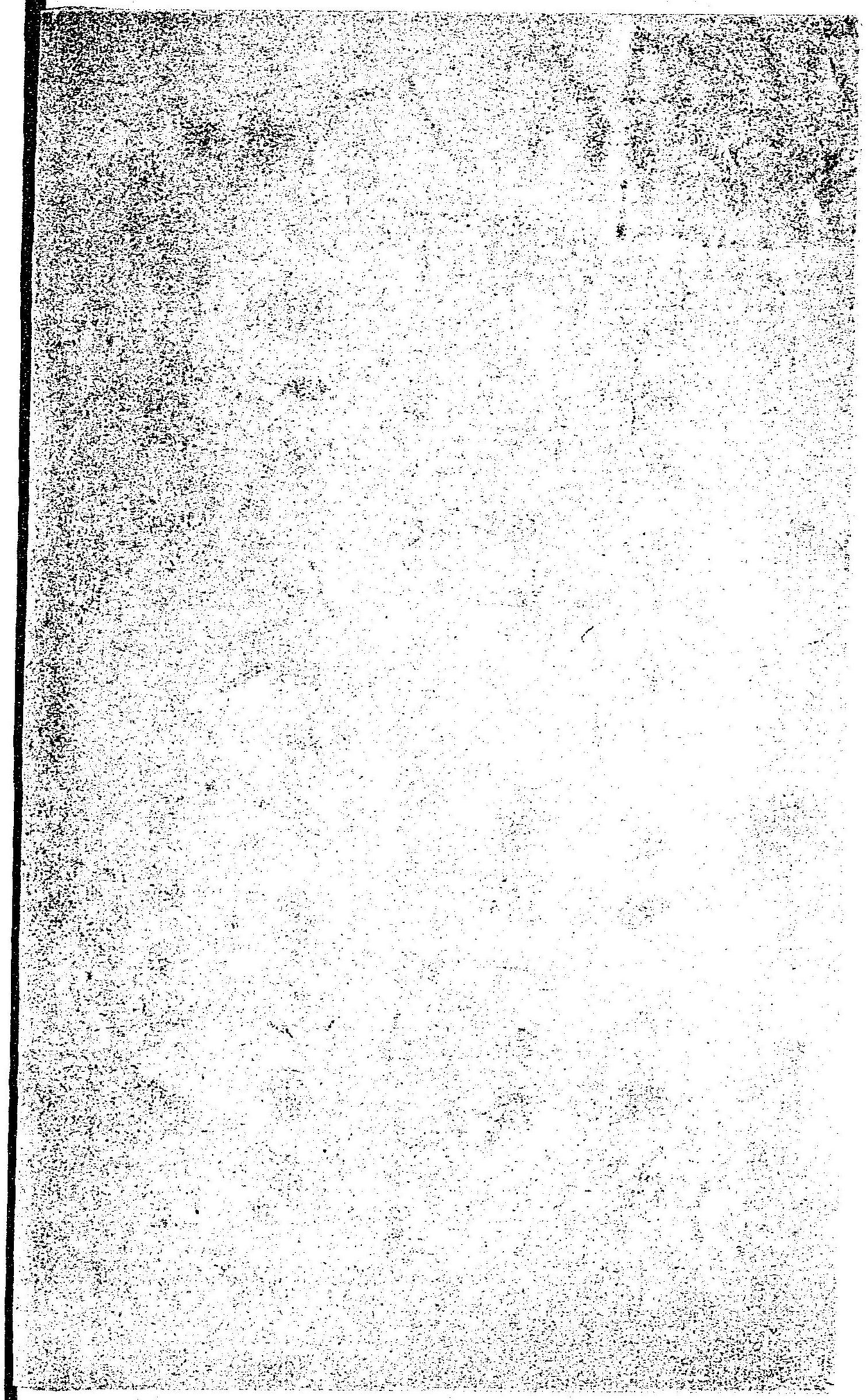
明治四十年十二月四日印刷
明治四十一年一月一日發行

定價金拾錢

著作兼發行者　東京府平民　中山瀧太
東京市淺草區馬道町一丁目三號七番地

印刷者　東京府平民　中山清助
東京市淺草區馬道町一丁目三號七番地

印刷所　並木活版所
東京淺草黑船町二十八番地

著作權所有

258
326